

古典紹介・解説

雁塔聖教序①

岩崎 双琴

雁塔聖教序とは、雁塔にある聖教（仏教のこと）の序文という意です。

初唐三大家の一人、褚遂良（五九六・六五八）58歳の書。楷書の名品中、最も格調高く、楮の最高傑作と云われています。

内容は唐の建国当初、仏典を求め、玄奘（三蔵法師）が世上の仏典の誤りを正すため、国禁を破ってインドへ旅立ち、幾多の困難を乗り越え、仏典を持ち帰りました。その功績を讃えた太宗が序文を作り、皇太子（後の高宗）による序記と合わせて、雁塔聖教序と呼ばれています。

他の楷書とは違う趣や、一点一画が微妙な抑揚の変化を学習していきましょう。

書譜①

島田美紀子

書譜は孫過庭によって著された書論です。

王羲之の書法を典型として位置づけ、いにしえの名家・大家の書について優劣を論じ、また先行する書論について評価を下し、学書のあり方の理想や書法のあるべき姿を説いています。草書の技法を学ぶにとどまらず、その書かれている内容にも是非興味を持ってもらいたい古典です。

約27cm×9mの卷子本であり、3727字の長文です。草稿本と思われませんが唐代の数少ない真跡の一つとして高く評価されており、草書の学習には欠かせない古典です。